春どり品種の大粒イチゴ
「ゆきララ」安定生産法
大苗&遅植えで収量増に

地方独立行政法人
北海道立総合研究機構
農業研究本部
花・野菜技術センター
花き野菜グループ
地子（じし） 立（たつる）

「ゆきララ」は2016年に道総研花・野菜技術センターが育成した無加温半促成作型向けの春どり品種です。道内の主要品種である「けんたろう」と比較すると、果実が大きく、規格内収量がやや多収、総収穫果数が少ないため、収穫作業の省力化が見込める品種として期待されています。そこで、今後の普及を図るために安定生産技術を確立しました。

写真　イチゴ品種「ゆきララ」

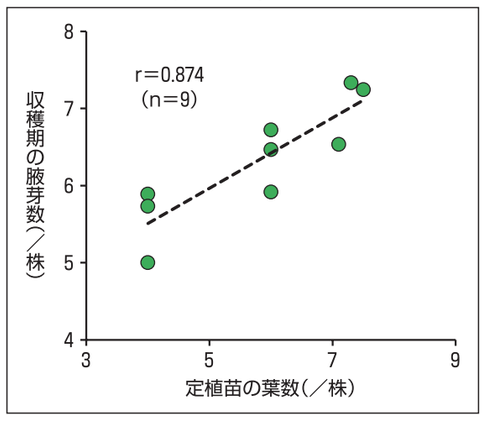
定植時の苗の葉数と定植期

収穫時の果房数はイチゴの収量を決定する大事な収量構成要素の一つです。そのため、果房数に特に強い影響を与えることが想定された①定植時の苗の葉数と②定植期について検討を行いました。

①定植時の苗の葉数

定植苗の葉数と収穫期の腋芽（えきが）数との間には強い正の相関が認められ、定植苗の葉数が多いほど、収穫期の腋芽数は増加しました（図1）。また、同様に収穫期の腋芽数と果房数との間にも強い正の相関が認められ、腋芽数が多いほど、果房数が増加しました。

図1　定植苗の葉数と収穫期の腋芽数の関係（花・野菜技術センターでの3カ年データ）



②定植期

主要品種である、けんたろうの定植適期よりも10日程度遅く定植すると果房数が増加する傾向が見られました。

以上の二つの効果によりゆきララでは、葉数の多い苗（大苗）を遅植えすることにより、大果の特徴を維持したまま、10%以上の多収を示すことが分かりました（図2）。

ゆきララを定植する際には、葉数の多い苗を優先して選び、地域におけるけんたろうの定植適期から10日程度遅く植える必要があります。その定植期は道南地域が9月6～15日、道央地域が9月1～10日、道東北地域が8月25日～9月5日となります。

なお、けんたろうの定植適期から20日程度遅く定植すると、遅すぎて減収するため、適期定植となるように心掛けます。

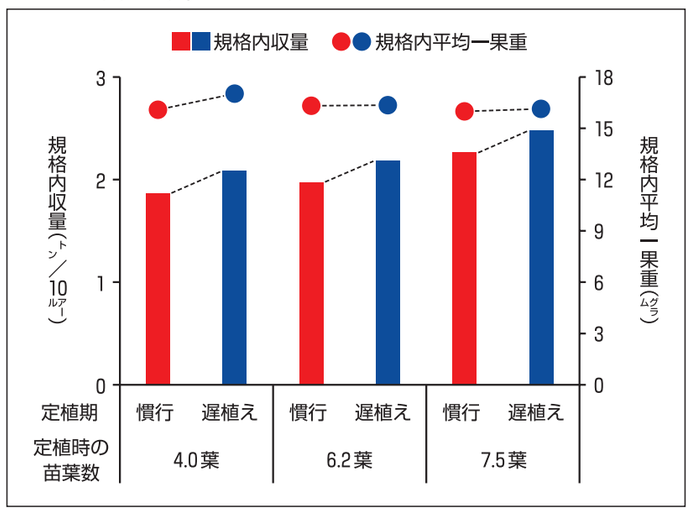
定植時の株間

定植時の株間もイチゴの収量に影響を与える大事な要素です。そこで、株間30センチと25センチの比較を行いましたが、全ての試験地ともに規格内果率と奇形果率には株間による影響が認められませんでした。

また、株間25センチに設定すると、花・野菜技術センターと道南農試では増収したものの、上川農試では減収しました。株間25センチでは密植栽培となるため、定植に必要な苗数が増え、苗のコストが増加します。加えて、苗数の増加により定植などの栽培管理作業の負担が増えることを考慮すると、ゆきララの定植時の株間は30センチが妥当と判断しました。

定植時の株間は30センチ
秋保温と頂花の摘花はしない

図2　苗の葉数と定植期が規格内収量および規格内平均一果重に与える影響（花・野菜技術センターの3カ年データ）



定植後の秋保温

けんたろうでは秋の温度管理として10月以降に畝上に不織布をべたがけして保温することで収量の安定化が図られます。そこで、ゆきララでもこの秋保温の必要性について検討しました。

その結果、試験地によって異なる結果が得られ、花・野菜技術センターでは規格内収量に増減がなく、道南農試では増加し、上川農試では減少しました。けんたろうと異なり、10月以降の秋保温では安定した増収効果が得られなかったため、ゆきララの栽培では秋保温は行う必要がないと判断しました。

頂花の摘花

収穫初期に発生する奇形果を減らす対策として頂花の摘花を検討しましたが、頂花を開花期に摘花すると、収穫初期および全期間の奇形果の発生が減少したものの、同時に規格内収量も低下する結果となりました。明らかな減収要因となってしまうため、頂花の摘花は奇形果対策として利用できないと判断しました。

ゆきララの安定生産技術

イチゴ「ゆきララ」の安定生産技術を表にまとめました。イチゴの無加温半促成春どり作型において、ゆきララを導入する際にご活用願います。

表　イチゴ「ゆきララ」の安定生産技術

項目	内容
定植期	各地域の定植期：道南9/6～9/15、道央9/1～9/10、道東北8/26～9/5
定植時の苗の葉数	葉数の多い苗を優先して選びます。
株間	30センチとします。
施肥方法	土壌診断に基づき「北海道施肥ガイド」に準じて決めます。
かん水方法	起生期から収穫始期までは1～2日に1回の割合でかん水を行い、pF値を1.8前後に保ちます。収穫始期からはかん水を徐々に控えます。
秋期の不織布べたがけ	増収効果が不安定であるため行いません。

注）下線部は「けんたろう」の栽培指針（2002年普及推進事項）からの変更点

終活のすすめ 11

（一社）終活マイライフ
理事
桜庭 康喜

地域の絆をつくる 集活を始めましょう！

長期化するコロナ禍問題は、今後の私たちの地域生活スタイルにも多くの課題を提起していますが、一番大切なことは、私たち一人一人が安全で安心に生活できる地域社会、穏やかな地域コミュニティーの絆（信頼と助け合い）を協力して創り上げることでは……と考えます。

（一社）終活マイライフは、人生100年時代の終活は死後の準備ではなく、これから生きなければならない時間を少しでも安心して生きるための準備と考え、終活＝集活（集い、語らい、絆をつくる活動）を提案しています。

ワクチン接種もかなり進んできていますので、マスクの着用、手指の消毒、お部屋の換気などの注意を払いながら、これまで親しくお付き合いをしてきた人たちが少人数で集まり、お互いの絆を再確認する交流を始めてはいかがでしょうか？

コロナ終息後の社会は、より一層、生活圏住民同士の信頼と絆が求められる社会になると考え、その出発点ともいえる「集活」を身近なところから始めることをお勧めいたします。